



1985-7

No.202

【表紙】

重要文化財
木製彩絵転法輪筒

解説は25ページ
題デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

全国高等学校総合文化祭を考える

加藤 衛 4

△随 想

教育における文化活動の必要性
内 木 文 英 8

△報 告

海外展報告 ロサンゼルス・カウンティ
美術館における「近代水墨画」展 10

京都国立博物館が照明学会普及賞を
受賞 14

重要文化財指定
“民家”の相続税評価方法の大幅改善整備 16

△展 覧 会

「シルクロードの遺宝」展
東京国立博物館 19

文化庁ニュース

- ・舞台芸術創作作品募集 25
- ・昭和60年度(第40回記念)芸術祭の開催計
画決まる 26
- ・昭和60年度文化庁派遣芸術家在外研修員
を決定 28

文化庁企画・提供
「美をもとめて」8月放送予定 30

- 町並紹介シリーズ ④荻と柳井 20
- 地域文化活動紹介シリーズ ②⑥福井県小浜市 22
- 国立劇場ニュース 文楽公演 他 31



全国高等学校 総合文化祭を考える



加藤 衛

(全日本アマチュア演劇協議会理事長)

高校生文化活動元年

期待感に満ちた「熱気」とはほど遠く、ただいたづらにさわがしい客席。学校というワクの外にいるという解放感、そしてもの珍らしさ、生徒たちの興奮状態は、そんなところに原因があるのかもしれない。ベルが開幕を知らせる。客席のざわめきはいっせいに静まりそうにない。幕が上がると、これまでとは異質の騒音が、客席を支配しはじめる。上演校の生徒たちからは声援が、他校の生徒たちからは野次が、舞台に向かって乱れとぶ、スポーツ観衆の騒ぎに、それは似ている。声援する生徒たちは、それが仲間への励ましと思いきんているようだ。舞台の演技者たちは、とまどいながら、稽古での手順を何とか間違わずにすすめることに懸命で、ひたすら客席の騒音とたたかい続ける。

終戦の翌々年、昭和二十二年のこと、ある都市で行われたいくつかの中学校、高等学校演劇部による「合同発表会」は、こうして、終始騒然とした状況のうちに、その幕を閉じた。

これはいささか極端な例だが、上演する側にも、観客の側にも、「芝居」ははじめての体験ではあるし、今日では想像できないほどの「とまどい」があったのは、たしかである。

終戦の年の暮頃には、もう、全国各地の戦場や地域社会では、アマチュア演劇活動が開始されていた。中等学校でも例外ではなかった。戦時下のさまざまな制約から解放されて、誰もが自由にならぬ世界を、何らかの方法で表出したいという思いにかられたのは、自然必然的であった。文学、音楽、美術、演劇というように、もちろん、その表出の場はさまざまであった。いづれにしても、それは極めて「人間的」な営みなのであり、別のいい方をすれば、「人間確認」の営みであった。なかでも、

もっとも身近な方法として、最初に演劇が選ばれたのは、これもまた自然であった。

ことに、当時の中学生の間で、教師や父兄の助言はあつたにしても、生徒自身の自発的な行動として、演劇活動が行われはじめたのは、とくに注目していいだろう。後の高校生による文化活動は、こうして、その元年の幕を開けたのであった。

人間による「創造」の成果が社会的価値として機能する時、それを「文化」と呼ぶなら、人間の成長過程のなかでもっとも重要な時期にある「高校生」による「文化（創造）活動」が担っている社会的役割の重さについては、こと改めていう必要があるまい。その役割とは、むしろ、社会への直接的な働きかけを意味してはいない。創造の主体者にとっても、鑑賞者にとっても、「文化活動」は自分自身の教育活動の場でもある。その体験、そして、そこから得られたものが、高校卒業後の生活のなかで、価値「創造」と人間「認識」にとって何らかの働きをすることは、十分に考えられる。それゆえにこそ、「文化活動」と呼ばれるのであり、社会的役割とはそのことをいう。文化活動が生徒教育の一つの方法であるのも、それゆえである。

全国高等学校総合文化祭の発足

文化活動元年からほぼ三十年、全国の高校生による「文化（創造）活動」の総合的な文化祭が開催されることになったことの意味は、極めて大きい。その本来の意味が果たされるようになれば、わが国の市民生活に、そして、市民の文化享受に、甚だしく大きな変化がもたらされるに違いない。

文化活動元年から日ならずして、文化活動は高校生活に著実に根を下ろしはじめ、文化活動の意味を果たすようになった。たとえば、生徒自身の演劇をとらえる眼は、年ごとにたしかさ

を増している。演劇の合同発表会での幕間には、鑑賞者としての生徒たちの間で、上演された劇にかかわる討論会が行われることがある。そこでの発言とか、客席の外にはり出された「壁」批評紙に勝手気ままに書きつけられた生徒たちの言葉には、極めて適切な評言が、しばしば見いだされる。高校生の手になるみごとな「戯曲」もつぎつぎと生まれている。

こうした基盤のもとに総合文化祭は発足した。機は熟した、ということだろう。

「文化」はいつの場合も、「市民生活」に根を下ろし、市民との深いかかわりをもたない限り、その生命は十分に機能し得ない。芸術の領域についていうなら、文学にしても、美術にしても、音楽や演劇にしても、市民の「日常的」な享受の対象となつてはじめて、「文化」的な役割を果たし得るのである。「日常的」とは、毎日という意味ではむしろない。どこに住んでいても、身近な図書館、美術館、劇場で、いつでも、芸術享受の機会を見いだすことのできる生活環境のなかで、市民が芸術鑑賞を日常生活の一部にとりこむことのできる状況を、「日常的」といっているのである。

残念ながら、目下のところ、わが国にはそのような社会的条件は、著しく欠けている。一般市民からの積極的な要求もない、ということでもある。芸術文化の享受は、市民にとっては、必ずしも、切実な問題となつてはいないということだろう。文化活動（もちろん、鑑賞という営みも、そこには含まれる）とのかかわりから、そのことが人間生活に欠くことのできない要件という認識を高校生がもつようになれば、そして、高校後の社会人としての生活のなかでも、その認識をもち続けてくれるなら、「文化」にかかわる社会的状況は、著しく変わるに違いない。高校生の日常的な文化活動を重視したいのは、それゆえである。

総合文化祭は、その日常的な文化活動の一つの到達点でもあり、また、通過点でもあり、文化活動の社会的意味の確認の場でもある。

その総合文化祭では、第一回(昭和五十二年)には演劇(十一校)、合唱(十五校)、吹奏楽(十二校)、邦楽(四十一校)、マーチングバンド・パトントワリング(七校)、吟詠(七校)が参加し、第二回にはさらに美術工芸(一四三校)、書道(二二八校)が、第四回には写真(四十六校)が、さらに第五回には郷土芸能(十六校)が加えられている。この参加種目にもみてとれるように、高校生の文化活動は多岐にわたっている。「文化活動」とは、そうしたものである。能力、資質、性格などに従って、人間の創造的意欲の「傾き」はさまざまである。

ただ、ちよつと気になるのは、参加種目のなかには、まだ十分に定着していないものもあることだ。たとえば、「郷土芸能」などは、地域によっては、適切な対象を見いだすににくいということもあろう。しかし、掘りおこされた郷土芸能の継承者としては、青年団員なり、高校生なり、若い人たちに期待しないわけにはいかない。

さらに、生徒自身の編集になる「学校新聞」の紹介の場なども用意されていないだろう。学校新聞は別の機関によってコンクールが行われているようだが、端的に生徒自身の生活そのものを反映している学校新聞の参加は、総合文化祭にいっそうのふくらみを与えることになろう。同様に、文学サークルがあるとするれば、その機関誌などの「展示」も、十分に考慮されていることのように思われる。作詩・作曲の試みにも、その発表の機会とは与えられていい。

たしかに、主催側の事情、会場設営の問題、あるいは、文化活動各分野の「全国的組織」の有無など、参加部門のこれ以上、扱には問題がないではなかった)は積極的に扱われていたが、このところ、消極的な姿勢がめだつようになってきている。文化活動としての演劇活動が、高校生活にしっかりと定着している時だけに、この現象は何とも理解しかねる。ドイツでは、レッシング、ゲーテ、シラー等の戯曲が、教科書にとりあげられている。どんな都市にも設けられている公立劇場では、年間を通じて、それらの作家の戯曲が上演されている。学校で学んだ戯曲を、生徒たちは、さらに舞台でたしかめることもできる。

舞台でたしかめる。といえは、ドイツでは、幼稚園児から高校生にいたるまで、日常的な演劇鑑賞の機会を与えられており、演劇鑑賞に限らず、音楽、美術、文学等の鑑賞も「日常化」されている。このような芸術享受は、人間としての当然の権利という認識が、一般市民に定着しているからである。

そのような認識のもとに、ドイツでは早くから、国あるいは地方自治体による劇場への助成制度が徹底的に行われており、ここ数年の深刻化した失業問題への対応としても、いくつかの劇場では、失業者に対する入場料割引制度が実施されている。

芸術鑑賞を人間の基本的権利ととらえる認識の定着には、高校時代の文化活動体験が、重要な役割を果たして、これがない。文化庁による「ことも芸術劇場」、「青少年芸術劇場」という舞台芸術鑑賞の機会の提供も、おそらくは、そのような発想のもとに生まれたものと思われる。

いずれにしても、前述の追跡調査は、高校生の文化活動体験が、必ずしも今日のところ、市民生活にはそれほど大きな影響を与えてはいない事情を、明らかにしてくれるかもしれない。住民の総合的な文化活動が、個々の住民の文化意識の開発に、極めてみごとく結果をもたらしている例を、西ドイツの一寒村

の多様化には、さまざまな障害はあるに違いない。総合文化祭は、年に一度の「お祭り」行事ではあるにしても、さらにそれ以上に、そこに参加した鑑賞者としての生徒たちの誰にも、何らかの「文化活動」へのきっかけを与える場としての大きな役割を担っている。可能な限りの参加部門の多様化に期待したいのも、そこに理由がある。

市民生活における文化活動

戦後四十年、すでに、高校生活を経てきた人たちは、国民の大部分をしめている。そのほとんどの人たちは、高校時代に直接的あるいは間接的に、文化活動にかかわりをもったことにはあるに違いない。にもかかわらず、市民生活における芸術文化享受の状況は、この四十年、あまり本質的な変化をみせてはいないように思われる。

高校時代の文化活動は、単に一時期のお楽しみにとどまり、過去のなつかしい思い出として、とじこめられたままになっている、ということなのだろうか。高校時代の文化活動体験には、市民生活に変化をもたらすほどの力はない、ということなのだろうか。文化活動というものは、それほどに無力なものなのだろうか。

高校時代の体験が、市民としての生活にどのような影響を残しているか、そのところを何らかの追跡調査によって、たしかめてみるのも面白い。

その結果に基づいて、高校生の文化活動や総合文化祭のありようを、見直すこともできるだろう。さらには、高校における教科の問題についても、新しい発見を期待していいかもしれない。

たとえば、かつて、国語教科書では「戯曲」(もつともその選

にみる)ことができる。バーデン・ヴュルテンベルク州に、エティックハイムという人口三七〇〇の小さな村がある。ここでは、毎年七、八月の二か月間、毎週土、日曜日ごとに、全村民による夜外劇が上演されている。座席四〇〇〇の野外劇場には、ドイツの各地域から観客が参集し、毎回全座席を満たしている。一九〇七年、村の司祭ザイエル神父の指導のもとにはじめられたもので、「人間の自由」に対する危機感から、演劇活動を通じて、村民のすべてに、「人間確認」の場を用意しようという意図のもとに生まれたものである。その主張は、シラーの「ヴィルヘルム・テル」が最多上演作品であることからもうかがえる。この演劇体験をもとに、村民たちは、シーズン・オフの余暇には、それぞれ、自分の好みに従って、思い思いの文化活動を行っている。

演劇活動という文化活動に触発されて、村の全住民が、その能力、資質に応じて、自己自身にとっての教育の場でもある文化活動を、積極的に展開しているところに、注目していいだろう。このところ、わが国でも、全国各地のマチぐるみの文化活動が、成果をあげつつある。その文化活動に、高校時代の文化活動体験は、どのように反映しているのか、興味のあるところもある。

くりかえしていうなら、高校総合文化祭への期待は、何よりも、参加者の誰にも「文化活動」を生涯の課題としてとらえるきっかけを与えてくれる、というところにある。

加藤 衛(かとう・まゐる) 大正三年、横浜生まれ。上智大学(文学部文学科)卒業。現在、共立女子大学教授、全日本アマチュア演劇協議会理事長。昭和三十五年NHK児童劇脚本賞受賞、昭和四十三年、神奈川県文化賞受賞、昭和五十三年、文化庁長官表彰、昭和五十四年、文部大臣表彰。

教育における文化活動の必要性



内 木 文 英
(全国高等学校演劇協議会会長)

戦後まもない昭和二十一年頃から旧制中

校の先生をしている。はじめはアルバイトであつたが、そのうち教えることが好きになり、とうとう四十年近くも教員生活が続けてしまつた。校長になつてから十六年あまりになるが、生徒といつしよに芝居を創ることを喜びとしてゐる。高校演劇の全国会長も今年で十五年目である。そしてようやくこの頃になつて、高等学校の文化活動も陽の目を見るようになったなと感ずるようになった。

高等学校のクラブ活動という点、どうして文化クラブの活動はその陰にかくれてしまいがちである。明るくて、行動的なスポーツクラブの活躍は、学校全体を勢いづかせ、生徒たちの意気を高め、教育効果をあげる上で必要欠くべからざるものだが、演劇、音楽、新聞、美術、放送、写真など、特に表現行動をともなう文化クラブの活動が陰にかくれてしまつてはこまる。つまり学校教育でのバラ

すがこわれてしまつたのだ。



十年あまり前アメリカに行つたことがある。FMラジオを利用しての通信制教育を長くやつてゐるので、ワシントンで開かれる通信教育の国際的な学会に日本の高校を代表して出席しないかという誘ひであつた。語学が弱いからとか、学校の仕事がいからと言ひわけをいつて断わるつもりでいたが、ニューヨークに三日間滞在すると聞いて考えを変えた。ブロードウェイで新しい芝居がいくつも見られるに違ひない。スピーチを土台に置いたアメリカの演劇教育を見てももらえるかもしれないと思つたからだ。

古いつきあひの、劇団「四季」の浅利慶太氏に出会つた時その話をする、ジーザス・クライスト・スーパースターをぜひ見ていらつしやい、ニューヨークの高校で演劇の授業が見られるように手配しましょう、と言つてくれた。実際の自分がおもてにあらわれてきて事を成就に導いたりする。もしかすると、これは演技や表現だけの問題ではないのではないかと、もっと大きな教育の本質にせまることがかくもされていまいだらうか。日本の学校教育では知的なものの育成に片寄りすぎて、人間を大きく育てあげる点では欠けている所が多すぎるのではないか。そんなふうに見えるようになった。

航空工業高校を見せられた時、格納庫のような実習場に、本物の飛行機が十数台並んでいて、一機に三、四人ずつの生徒がとりついて、油にまみれて実習にあたつてゐた。国が異民族の集合体ということもあるが、スピーチという科目が小学校の必修科目になつていて、国語(英語)と同じ重さで、週五時間も学習している。教えているのは大学の演劇科を卒業し、教育実習を経てライセンスを手にした人たちだ。

抽象的な物事の理解や、知識の集積を無意味であるというわけではないが、吸収力のすぐれた若い者たちの教育は、もっと具体的に、もっと徹底的でなければならぬ。そんなふうを考えてしまふのだ。



戦後まもなくはじまつた学校の中での文化活動も、学校教育にかかわる制度がとのつていくにつれて、運営が苦しくなつた。運動部に関する活動については、一般に好意的な

た。もと「四季」について、ニューヨークに住んでいる女性と連絡をとつてくれた。そのおかげで、ジーザス・クライストをはじめ、テネシー・ウィリアムズの新作や、オフォブロードウェイの芝居まで見ることができた。飛行機の整備技術を教える工業高校での演劇授業(これは名作の読み合わせ程度のものであつたが、生徒の発声がよくつた)を見せてもらった。その先生の紹介で、マンハッタンのど真ん中、五番街近くにある芸術創造学校(スクール・オブ・パフォーミング・アーツ)を見せてもらった。

芸術教育を重要なものと考えて、二十年ほど前(つまり今から三十年あまり前)、ニューヨーク市長が、演劇、音楽、舞踊の三学科を持つたこの四年制の高校を作つたのだ、と案内者は話つてくれた。日本では学校の中で演劇を教えることはほとんどとされてない、と私は説明した。しかし、クラブとしての演劇活動はなかなか活発で、高校の演劇クラブ二千を集めて作つてゐる会の私は会長である。各地の代表校を集めて年一回全国大会を開いてゐるといふと、案内者は驚いたような感心したような顔つきをして、それは本当か、本当にオールジャパンか、と訊ねるのだ。まちがひなくオールジャパンで、ツウサウザンだという、それから異常な熱心さで芸術教育の実際を話し、案内をしてくれた。

演技実習をしている教室で、二年生の生徒ののだが、文化クラブについては関心の度合が低いのだ。たとえば演劇の場合、地域のクラブが集まつて合同発表会を開くにも、コンクールを開くにも困難があつた。資金集めに苦労する。一般の理解を得るにもなみなみならぬエネルギーを消費する。先生と生徒が一体になつて、ごまかしのきかない舞台作りになつて、そのものに価値を感じ、その運動を推し進めることにある使命感を感じて事にあつてきたわけだ。全国各地で、高校での演劇活動に情熱を傾け、その地域での文化活動のうちこんでいるたくさんの人々が結果として全国組織が生まれ、全国大会が開かれるようになった。今からちょうど三十年前、昭和三十年のことである。

文化庁の強力な助けを借り、音楽、美術、書道などの文化活動を集め、演劇をふくめた第一回全国高等学校総合文化祭が千葉県で開かれたのが昭和五十二年のことである。今年はその第九回大会が開かれることになつてゐる。「陽の目を見るようになった」といふのはそのことである。

次の目標は、スポーツを支える高体連のような、高校文化連盟の組織を作ることだければなるまい、と考えてゐる。

内木 文英(なき、ふみこ) 大正13年、東京生まれ。早稲田大学、文学部卒業。現在、東海大学付属浦安高校校長、全国高等学校演劇協議会会長。昭和59年、東京都教育功労賞受賞。著書：「内木文英一編劇集」

たちの授業を、二時間はと大教室の隅に座りこんでながめていた。実習のうちこんでいたのは五十名ほどの生徒たちだ。ふたりの女教師が指導にあたつてゐた。肌の色も身体の大ささもまったく違う生徒たちが、与えられた課題に熱心にとり組んで、身体を動かさし、声を発している姿は壮観だつた。童話に出てくる人物を表現することがその課題であつた。ピノキオもいたし、ピーターパンもいた。衣裳もひとりひとり工夫してこしらへたものであるという。衣裳なしで、黒いタイツのまま演じているものもいた。汗ばんだ手足を思ひきつて動かしながら、彼等は夢中になつて演じていた。それはまことに感動的な情景であつた。

授業が終わつた時(終わつてもあとに残つて、相当な人数の生徒が、くりかえし練習してゐたが)指導の先生たちと話しあふ機会を得た。「演技とは、身体の奥にかくされた、もうひとりの真実の自分を発見することだ、と思う。」と、その先生の一人がゆつくりと話してくれた。その通りだと思ふ、と私は答へたが、そのことがそれから後も、私の胸をつきあけて出てくることになる。

学ぶという行動の目標の一つに、真実の自分に気づくということがあるのではないかと、と考へたりする。「演技」ということは「表現」と置きかえてもいいのではないかと、思つたりする。精一杯がんばつてゐるうちに、自分にも気づかなかつた、もうひとりの

【後記】

○高校生の文化の祭典、「普通高等学校総合文化祭(略称、高文祭)」が、八月二日から七日まで岩手県で開催されます。巻頭に執筆頂いた加藤先生は、高文祭に当初から関わってこられた方ですが、論文の中にもありますように、「文化」はいつの場合も、「市民生活」に根を下ろし、市民との深いかかわりをもたない限り、その生命は十分には機能し得ない」と考えられます。その意味で、高文祭は「その日常的な文化活動の一つの到達点でもあり、また、通過点でもあり、文化活動の社会的意味の確認の場でもある」と書いておられますが、現在文化庁が検討している「国民文化祭(仮称)構想」の趣旨も、このような考え方と相通するものがあるように思われます。○学校も夏休みに入り、本格的な夏の到来となりました。皆様方も色々と夏のプランを練っておられることと思います。役所はこれから六十一年の概算要求作業に入りますが、私共も合間をぬって、心身のリフレッシュに励みたいと考えています。(S)

【広告の問合せ・申込み先】

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)二三六八二二四(代表)

【「文化庁月報」七月号】

昭和60年7月25日印刷・発行
(通巻第二〇二号)

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03)二三六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一一六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二一六〇円(送料共)